GEKKAN-WIEN Dezember 2022 令和４年 12 月号 Nr. 395　平成元年創刊 gegründet 1989

月刊 ウィーン
GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 34 年目　Nr. 395
2022年12月号

René Magritte, La voix du sang (Die Stimme des Blutes), 1959　mumok – Museum moderner Kunst Stiftung Ludwig, Wien, © Bildrecht, Wien 2022

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 128

総合資源エネルギー調査会の革新炉ワーキンググループ（座長＝黒﨑健・京都大学複合原子力科学研究所教授）は一一月二日の会合で、次世代革新炉の建設に向けた人材育成や国民理解の促進を中心に意見交換を行った。同ＷＧは、前回一〇月二四日の会合で、「革新炉開発に関する検討の深掘り」として、今後の論点を、（一）事業環境整備、（二）開発体制・司令塔組織、（三）サプライチェーン・人材の維持・強化、（四）研究基盤整備―に整理した。

その中で、原子力サプライヤの実態に関し、資源エネルギー庁は今回の会合で、「中核技術を持つ一方で、政府支援が行き届かないまま、原子力事業から撤退する例がみられた過去の反省を踏まえ、重要企業を把握し、必要な支援策を講じる体制構築が必要」との問題意識から、新たな原子力サプライチェーン体制を提案。地域の関係機関と連携し、日頃から中小企業などへの支援を行う地方経済産業局のネットワークを活用した「原子力サプライチェーンプラットフォーム」を立上げ、支援策の検討・拡充が継続する仕組みを構築していくもの。資源エネルギー庁の説明によると、原子力を支えるサプライヤは全国に約四百社点在しており、原子力事業以外を柱とする企業が多くを占めている。

人材育成については、「原子力人材育成ネットワーク」の戦略ＷＧ主査を務める吉村真人氏（日立製作所）が産業界における現状と課題について発言。同ネットワークの戦略ロードマップ改定において議論している十年後を見据えた人材構成上の課題の一つとして、建設や運転期間延長に係る人材の維持・育成を指摘。国内における建設空白期間の長期化が及ぼす影響に関し、設計、製造、調達、建設、試験・検査の各分野で「新規建設を通じてのみ習得可能な技能があるのだが、教える側も既に建設の経験がない世代になっている」などと懸念を示した。

さらに、文部科学省研究開発局原子力課長の新井知彦氏は人材育成の取組として、二〇二〇年度から進めている複数の大学・研究機関、企業などが連携したコンソーシアムを形成し、教育資源・機能の結集・相互補完を図る未来社会に向けた先進的原子力教育コンソーシアムを紹介。同コンソーシアムをリードする北海道大学拠点のオープンカリキュラム・実習の受講学生からは「就職先として原子力・放射線分野に関心を持った」という声も多く聞かれているという。

「新たな原子力サプライチェーン支援体制」
https://www.jaif.or.jp/journal/japan/15280.html

これに対し、高等教育に携わる立場から高木直行委員（東京都市大学大学院総合理工学研究科教授）は、原子力関係学科への進学を巡る学生の志望意識低下や親の反対など、厳しい現状を述べ、「大学だけの努力ではもうどうにもならない。原子力産業の低下は不可避」と憂慮。その一方で、全学対象の原子力関連講座に多くの学生が集まっている近況を、最近の革新炉開発関連の報道などによる効果ととらえ、国においても「予見性あるビジョン」が示されることを求めた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な経済学者・思想家（その三）を紹介したい。一八九九年 ウィーンの学者家庭に生まれたフリードリヒ・ハイエクは、一九一七年、第一次世界大戦のイタリア戦線において飛行観測手として兵役に従事し、左耳を負傷する。一八年ウィーン大学に入学し、二一年に法学博士号、二三年に政治学博士号を取得し、渡米してニューヨーク大学で研究助手として働く。二四年にウィーンに戻り、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスに見守られて研究サークルを作る。二七年にオーストリア景気循環研究所所長、二九年にウィーン大学の講師となる。一九三一年、ライオネル・ロビンズにロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（ＬＳＥ）での講演に呼ばれ、これ以降、ＬＳＥの教授職を務める。四四年に発表した「隷属への道」では、社会主義、共産主義、ファシズム、ナチズムが同根の集産主義であると批判し、当時のベストセラーとなった。五〇年、シカゴ大学の社会科学ならびに道徳科学の教授となる。六二年、西独フライブルク大学の経済政策教授となり、六八年に同大学を退官後は、九年間オーストリアのザルツブルク大学で教える。七四年にノーベル経済学賞を受賞した。ハイエクは、オーストリア学派の代表的学者の一人であり、経済学、政治哲学、法哲学、さらに心理学にまで渡る多岐な業績を残し、二〇世紀を代表する自由主義の思想家である。米国のレーガン大統領は自らの思想に最も影響を与えた一人としてホワイトハウスでハイエクを歓迎した。九二年逝去の報に際して、ブッシュ大統領は追悼声明の中で「現代の最も偉大な思想家の一人」と称えた。

一方、一九二〇年に京都市に生まれた梅棹忠夫教授は、三六年、京都一中（現：京都府立洛北高等学校・附属中学校）から四年修了（飛び級）で第三高等学校に入学。三高時代から山岳部の活動に熱中して学業を放棄し、二年連続で留年して退学処分を受けるも、後輩や同級生からの嘆願運動で復学を認められる。京都帝国大学理学部動物学科在学中には今西錦司を団長とする中国北部『大興安嶺探検隊』などの探検に参加活躍した。四三年、京大大学院入学、四九年に大阪市立大学理工学部助教授、六一年には「動物の社会干渉についての実験的ならびに理論的研究」にて京都大学より理学博士号を取得。六五年、京都大学人文科学研究所助教授、六九年に同教授、七四年には国立民族学博物館初代館長を務める。我が国における文化人類学のパイオニアであり、梅棹文明学とも称されるユニークな文明論を展開し多方面に多くの影響を与えている。京大では、今西錦司門下の一人であった。生態学が出発点であったが、動物社会学を経て民族学（文化人類学）、比較文明論に研究の中心を移した。代表作『文明の生態史観』の他、数理生態学の先駆者（オタマジャクシの群れ形成の数理）でもある。梅棹教授は青年期より登山と探検に精を出し、数多くのフィールドワークや京大人文研での経験からＢ６カードを使った情報整理法を考案。その方法をまとめた『知的生産の技術』はベストセラーになり、同書で紹介された情報カードは「京大式カード」という名で商品化された。同書では「出来ないことをしようとすることが「無理」、出来ることから拡げていこうとすることが「チャレンジ」と述べている。八八年にフランス教育功労章、九四年に文化勲章を受章している。

余談であるが、筆者は二〇一〇年十一月に設立された原子力人材育成ネットワークの初代事務局長を務めた。ハイエクの著作に縁はなかったものの、六〇年代に何度か来日した際にハイエクの通訳を務め、ハイエクに関する著作も多い渡部昇一上智大学名誉教授の評論や著作はよく読んだ。学生時代に読んだ梅棹教授の『知的生産の技術』に倣って、京大式カードをしばらく使っていた。今月も両市に関連する偉大な経済学者・思想家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン大学が所蔵するハイエクの写真を掲載させていただく。

■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■

ウィーン大学出身ノーベル賞受賞者のインスタレーション（ウィーン大学構内）

ウィーン市所蔵（図書館）

ウィーン市 18 区にある墓